

豊岡市の取り組みから島根の地域づくりを考える

生物多様性研究分科会

大嶋辰也

1. はじめに

最初の「生物多様性国家戦略」が平成7年10月に策定されて今年で21年、「生物多様性」という言葉がどれだけ一般社会に認識され、取り入れられてきただろうか。私のまわりでは、「生物多様性」は未だに希少動植物と同様、「日常とは違う特別なもの」というニュアンスで話題になることが多い。

一方で、赤名湿地性植物群落、カキツバタの保全活動（三瓶山）、三瓶山西の原火入れ、中海の自然再生事業、棚田の保全活動（山王寺・大原新田等）、イズモコバイモの保全（川本町等）など、生物多様性の保全に関する大小様々な活動が、様々な主体の単独・協働の形で増えていることも事実である。直近の話題としては、「斐伊川水系生態系ネットワークによる大型水鳥類と共に生きる流域づくり検討協議会」（国交省事務局）が発足し、生物多様性と地域づくりを絡めた広域連携の取り組みがはじまりつつある。これらの取り組みの成否は、事前の計画・フレームワークづくりも重要だが、それ以上に、地域住民の理解・意識の向上が鍵を握る。

そこで、平成28年は、島根県で生物多様性の保全を内部目的化して地域づくりを進めるためのヒントを探すため、「コウノトリ」をキーワードに多様な地域づくりが進められている先進地域（兵庫県豊岡市）を視察した。

2. 視察の概要

兵庫県豊岡市の「円山川下流域・周辺水田」は、“コウノトリ野生復帰”、“再生”、“創造”、“環境経済”等をキーワードとした豊岡の自然とのかかわり方が評価され、平成24年度にラムサール条約登録湿地として登録された。

今回の視察では、兵庫県豊岡市の行政関係者や地元NPOの方など、複数の関係者の方に聞き取りを行い、先進地における取り組み状況、今後の課題点等をうかがった（表-1参照）。

表-1 視察箇所及び聞き取り相手

視察箇所	ヒアリング相手
コウノトリの郷公園	・コウノトリ文化館（NPO 法人コウノトリ市民研究所） 副館長：高橋さん ・豊岡市コウノトリ共生部：成田さん
田結地区	・区長さんほか2名
戸島湿地	・NPO 法人コウノトリ湿地ネット 代表：佐竹さん



吉田薫氏撮影（H28.11.12）

2. 豊岡市の視察概要

2.1. 兵庫県立コウノトリの郷公園（豊岡市立コウノトリ文化館）

2.1.1. 施設の概要

兵庫県立コウノトリの郷公園は、兵庫県の施設として「種の保存と遺伝的管理」、「野生化の科学と実践」という基本的機能を担っている。また、平成26年に兵庫県立大学大学院（地域資源マネジメント研究科）が開設され、本格的に研究活動が始まった。一方、今回聞き取りした「コウノトリ文化館」は、豊岡市のビジターセンターとして、人と自然の共生できる地域づくりの拠点として、住民の視点から、コウノトリをはじめ、豊岡盆地の自然・文化・産業などが紹介されている。現在は、NPO法人コウノトリ市民研究所が指定管理者として運営している。

【コウノトリ保護の歴史】

- ・S40:人工飼育開始
(S46:野生個体絶滅)
 - ・H11:コウノトリの郷公園開設(分散飼育開始)
 - ・H14:野生コウノトリ(ハチゴロウ)飛来
 - ・H17:試験放鳥開始
 - ・H19:自然繁殖成功
 - ・H21:野生復帰グランドデザイン策定
 - ・H25:野生コウノトリが韓国へ渡る
- 出典)コウノトリ野生復帰のあしあと(豊岡市)

2.1.2. 聞き取りから特に思ったこと（聞き取りの詳細は表-3 参照）

コウノトリへの市民の意識が大きく変化したのは、大陸から飛来してきたコウノトリ（飛来日の8/5から“ハチゴロウ”と命名）が住み着いてからとのこと。意識の変化にはシンボリックな何かが必要だと改めて感じた。また、入館料を無料にすることで、地元の人が来やすい環境づくりがなされている。活動を広げるためには、“気軽さ”が一つのキーワードかもしれない。

なお、豊岡生まれのコウノトリは足環によって個体識別ができるとのこと。

表-2 視察時の状況（コウノトリ文化館）

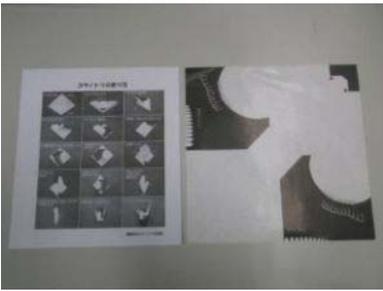
公開飼育ケージ	コウノトリの抱卵体験	聞き取り時の状況
		
豊岡育ちの個体の足環	コウノトリの折り紙（前）	コウノトリの折り紙（完成）
<p>豊岡で生まれ育ったコウノトリには、ほぼすべてに足輪がつけられています。 「大きな鳥がやってきた!」→「写真や双眼鏡で足輪を確認!」→「どの個体かがわかります!」</p> <p>(例) 右  左  右が黒で左が赤黒黄だから... J0051(♀)だ!</p> <p>(P20~21 野外個体一覧表参照)</p> <p>出典)コウノトリ野生復帰のあしあと(豊岡市)</p>		

表-3 コウノトリ文化館での主な聞き取り内容

項目	聞き取りの内容
NPO 法人コウノトリ市民研究所について	<ul style="list-style-type: none"> ・1998年に高校生物部OBを中心に設立。2004年5月20日（生き物共生の日）にNPO法人化。主な活動は環境学習と生き物調査。 ・豊岡市との共催で“田んぼの学校”を開催。“田んぼの学校”はゆるい結束（強制しないなど）が基本。来年4月より、コウノトリ、文化、ジオの考え方を基本としたふるさと教育を実施予定（小3～中3）。
コウノトリ文化館の運営	<ul style="list-style-type: none"> ・収益は指定管理者、田んぼの学校参加費（100円/名）。 ・来館者数は年間約30万。入館料は無料。地元の人でも気軽に入ることができる。これがメリット。別途、一口100円の環境協力金の制度あり。一口当たり2枚の折り紙（完成するとコウノトリ）がもらえる。 ・環境学習は、市（文化館）が一般市民を、県（大学）が学校関係者を対象とし、役割分担しながら対応している。 ・インバウンドを視野に入れて、WiFi設備の充実を図る予定。
コウノトリについて	<ul style="list-style-type: none"> ・豊岡が最後の生息地になったのは、豊岡盆地が海から近い盆地で餌が豊富にある湿地（水田等）が広がっているから。豊岡盆地が鳥に選ばれた。 ・大陸から渡ってきた野生のコウノトリ（ハチゴロウ）が飛来してきたことによって、市民の意識が変わった。今、野生個体が公園内で放鳥した鳥と繁殖するようになった。 ・豊岡生まれのコウノトリには、左右の足に複数の足環が付けられ、個体識別できるようになっている。
豊岡市について	<ul style="list-style-type: none"> ・旧農林水産部等から共生部（農林・地域づくり・保護）へ。 ・豊岡モデル（豊岡にある資源を活かしながら、様々な分野の取り組みを有機的に連携・拡大しながらまちづくりを進める）の典型として、コウノトリ野生復帰の取り組みを今後も続ける。

2.2. 田結湿地（田結地区）

2.2.1. 田結湿地の概要

ここの特徴は、一つの集落の運動ということである。複数の所有者が持つ水田（休耕地主体）をコウノトリの餌場となりうる一つの湿地として整備された。また、私たちのような視察者・観光客を対象に、田結湿地の自然や取り組み等について地元の方がガイドされている。案ガールズ（un ガールズではありません）が結成されているが、残念ながら？（そんなことはありません）自治会長さんはじめ、中心人物の方々に案内していただいた。

2.2.2. 聞き取りから特に思ったこと（聞き取りの詳細は表-5 参照）

最も聞きたかったことは、一つの集落でなぜ、この取り組みが始まったのかということである。結論は「ハチゴロウが飛来してきたから」。田結がハチゴロウが選ぶほど価値があると思われたことがきっかけのようである。やはりシンボルは重要と考えられたが、それよりも「ハチゴロウが選んでくれた」と思うことのできた地元の方の感性も重要ではないかと感じた。その感性はなぜ生まれたのか？島根でも棚田の活動を一生懸命行っている人がいる。地元の真の価値を感じた時なのかな？、とうっすら思った次第である。

表-4 視察時の状況（田結湿地）

現地視察時の状況	田結湿地（元は水田）	シカの食害
		

表-5 田結湿地での主な聞き取り内容

項目	聞き取りの内容
活動のきっかけ	<ul style="list-style-type: none"> 田結の休耕田にコウノトリ（ハチゴロウ）は舞い降りた。ハチゴロウが田結を選んだ。そこから取り組みが始まった（それまでは関心なし）。 田結湿地が東京大学の研究フィールドになった。大学とのつきあいの中で、地域の自然をより深くみるようになった。また、大学の先生より「コウノトリの餌場環境として良好ですばらしい」と高く評価された。
田結湿地の特徴	<ul style="list-style-type: none"> 急峻な谷間を開墾してできた耕作地であるが、近年、休耕田が増えた。 複数の所有権のある田んぼをまとめて湿地状にした。様々な取り組みがなされている。 シカの影響で下層植生はほとんどない。兵庫県の他地区ではシカの食害が問題になっているが、ここではコウノトリの餌場としての環境を維持する上での適度な攪乱要素となっている（所変われば評価も変わる）
活動状況	<ul style="list-style-type: none"> 案ガールズを結成。田結湿地に来る人の案内をしている。豊岡市が見学者と田結地区との調整役。 自治体の全ての構成員が活動を応援している訳ではない。コウノトリの活動費が自治会費にも含まれている。ガイド収入等を自治会の会計に組み込み自治会費を減額するなど、経済的な視点でも配慮されている。 当初からの新規メンバーはなく、将来を担う人へのつながりが無い。

2.3. 戸島湿地

2.3.1. 戸島湿地の概要

豊岡市立ハチゴロウの戸島湿地は、豊岡市の北部円山川河口近くに位置する。戸島湿地は、元々膝まで浸かるような湿田であったため、平成17年に地元の念願の土地改良事業（嵩上げ）がやっと始まった。工事が半分進んだところで、未施工で湿地化した場所に一羽のコウノトリ（ハチゴロウ）がやってきた。議論の末、農家は『工事予定地の半分は予定通り嵩上げ工事を行い、残る半分はコウノトリの環境にするために市に提供する』ことを決断され、田んぼはコウノトリの餌場に生まれ変わることになった。平成21年4月、豊岡市立ハチゴロウの戸島湿地が開設された。現在は、指定管理者としてNPO法人コウノトリ湿地ネットが管理・運営されている。

2.3.2. 聞き取りから特に思ったこと（聞き取りの詳細は表-7 参照）

1) コウノトリの分布情報の提供のお願い

豊岡市は“コウノトリに選ばれた地”ということで、当初は、コウノトリをあまり他地域に出したくない思いがあったそうである。しかし、豊岡盆地の許容量を超えた現在、その考え方は元々の分布域を復元したい思いに変化し、最近では、千葉県、福井県や韓国での放鳥に協力したとのこと。

豊岡で育ったコウノトリには足環で個体識別ができる。また、発信器を付けた個体もあり、これらによって豊岡生まれのコウノトリの分布情報がわかる仕組みになっている。出雲市や雲南市にも飛来しているようであるが、それは発信器を付けた情報によるものとのこと。足環による島根からの情報提供もお願いされていた（広域連携）。



管理棟にあるコウノトリ飛来図

なお、兵庫県立コウノトリの郷公園のHPには「あなたのまちにコウノトリが飛来したら」というパンフレットがある。もし皆さんがコウノトリを島根で発見されたら、このパンフレットに基づき情報提供をお願いしたい。

2) 地元の方の想い（農家の方など）

コウノトリの郷公園の整備予定地周辺では、野生復帰を目的とした公園計画が明らかになった時点で、コウノトリと共生する取り組みを自主的に始められたとのことである。その他の地域では、「ハチゴロウ」の飛来が及ぼし

表-6 視察時の状況（戸島湿地）

ラムサール条約の案内板	戸島湿地（汽水域のヨシ帯）	戸島湿地（淡水域の湿地）
		
コウノトリの飛来地情報	ヨシを混ぜた木質ペレット	ヨシ船の前で記念撮影
		

た影響は大きく、コウノトリが生息できる環境づくりへの意識が一気に向上したとのこと。内外を問わずシンボリックな存在の重要性を感じた。

3) その他（ヨシを混ぜた木質ペレット）

戸島湿地の管理棟の中にあるストーブの横に、ヨシを混ぜた木質ペレットがあるのを発見した。島根県でも宍道湖のヨシを活用する試みがあるので、参考になるのではないかと思った。

表-7 戸島湿地での主な聞き取り内容

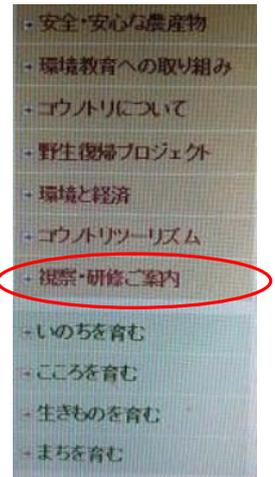
項目	聞き取りの内容
コウノトリの野生復帰について	<ul style="list-style-type: none"> コウノトリは農村部・人里に生息する鳥で、産業・生活などに密接に関わっている。コウノトリのような生態を持つ種が住むのは、人にとっても良い環境である。このような環境を取り戻したい。 川で牛が水浴びをする横でコウノトリが立つポスターが有名になった。 日本に来るコウノトリは、好奇心が強くその年生まれの個体である。日本に来る個体は昔から単独である。当初、コウノトリを豊岡に定着させたいと考えていたが、今豊岡は飽和状態と考えられる。そのため、今は遠くに行かせたい。元々行動範囲が広く、1日で佐世保くらいまでは飛ぶ。元の分布域を復元することを目指したい。ロシア、中国と比較して越冬先がよければそこに留まる。強力な渡りの習性はない。 採餌環境は明るく低茎で流れのゆるやかな場所である。 コウノトリは幸せを運び、農業につなげる。
豊岡市での取り組み	<ul style="list-style-type: none"> 地元として最初に活動があったのは、コウノトリの郷公園の隣接する地区である。「隣にコウノトリの保護施設ができる」ということで、自主的にコウノトリと共存する取り組みを始められた。 県の施設で学術的な保護増殖活動、豊岡市が住民、文化の視点、コウノトリ本舗が環境と経済の融合の方法を考え実践する場。 当初は農薬不使用の方針に農家は反対した。そこで、隠れ有機農家や有機方法をやりたい人で勉強会を開催した。“あいがも農法”を行い、その翌年にあいがも農法研究会を立ち上げグループ化した。現在 JA がその研究会の事務局になっている。
放鳥の経緯	<ul style="list-style-type: none"> 昭和40年に野外のコウノトリを保護のため檻の中に閉じ込めた時、「いつか増やして、きっと空に帰すから！」とコウノトリと約束を交わした。 昭和61年に絶滅した。2005年に最初の放鳥を行ったが、水田の乾田化に伴い、絶滅した昭和61年と比較して環境は悪くなっている。そこで、市が補助を出して、休耕田を活用したビオトープの整備が進められた。 圃場整備中にハチゴロウが飛来した。水田面積は少なくなるが、水田の一部を公的に買い上げて兵庫県と豊岡市が整備し、戸島湿地ができた。 豊岡生まれの個体は生後45日で足環を付けて個体識別できるようにしている。足環をみることにより、どの個体かがわかるので、島根県でも確認された場合は、情報提供をお願いしたい。
連携	<ul style="list-style-type: none"> 鳴門ではレンコン畑を餌場としているなど、豊岡とは異なる知見もあるので、各地の活動とのネットワーク化を進めたい。 韓国でも日本とほぼ同時期にコウノトリが絶滅している。最近、礼山郡で保護活動が動き出し、視察にもやってきた。
課題等	<ul style="list-style-type: none"> 生産性を伴わないのに、維持管理ができるのか。 10年・20年後の豊岡は、人と人がつながり、コウノトリが舞い続け『治水』も含めて『命』が守られてほしい。

2.4. その他

2.4.1. 豊岡市の取り組み

豊岡市は、「いのち・ところ・生きもの・まちを育む」をキーワードに、コウノトリの野生復帰の取り組みを産学官民の連携で地域づくりにまで高めた先進地域である。豊岡市のHPのトップページでは、「市民ガイド」「観光・イベント」の次に「コウノトリと育む」が続く。「コウノトリと育む」を開くと、右下に示すメニューが出ており、農業、環境教育、コウノトリツーリズムなどが並ぶ。今回の視察では「視察・研修のご案内」のクリック一つで豊岡市の方に大変お世話になった。今回の有意義な視察は、おもてなしの心で協力・調整していただいた豊岡市さんのおかげである。

豊岡市
HP →



2.4.2. SNSの活用

びっくりしたことがもう一つ。今回視察した3箇所とも、視察後すぐにSNSで情報発信されたことである。皆さんにとっては当たり前のことかもしれないが、このスピード感はやはり重要と感じた。

表-8 視察場所からのSNSを活用した情報発信

コウノトリ文化館	田結地区	戸島湿地
<p>豊岡市立コウノトリ文化館さんが写真2件を追加しました。 11月12日</p> <p>鳥獣害技術士会生物多様性研究分科会の7名の皆さんが視察に見えられました。熱心に勉強され、NPO法人コウノトリ市民研究所との意見交換も活発に行われました。</p> <p>皆様今後の活動に、私たちの取組みが少しでもヒントになれば幸いです。本日のご来館、ありがとうございました。</p>	<p>鳥獣害技術士会の皆さんが視察にこられました。 11月12日</p> <p>11月12日、鳥獣害技術士会生物多様性研究分科会より7名の皆さんが田結地区の鳥獣害技術士会とは、国家試験で技術系の「士」のつく資格保有者で、様々な分野で、鳥獣害内に意をいしは過去に、在生、を職した経験士が加入し、研充や研修により回っておられる団体だそうです。(鳥獣害技術士会のHPより)</p> <p>今回は、豊岡市が行っている「コウノトリ野生復帰事業」に意を込んでいるのも、これをキーワードに、それらに関わっている「尾守野」長の取り組みを視察・研究し鳥獣害に対策にこられました。</p> <p>集会后で、双方挨拶後、今回の目的をお話し、湿地内を歩きながら地区の色をいただきました。</p>	<p>豊岡市立ハチゴロウの戸島湿地さんが写真2件を追加しました。 11月13日</p> <p>11月13日(日曜日)の午前、鳥獣害技術士会生物多様性研究分科会より7名の皆さんがお越しくださいました。戸島湿地の説明とコウノトリ野生復帰の成功には、つながっていくこと」の大切さを皆さんとともに再確認しました。</p> <p>「10年・20年後の豊岡はどうなっているか」と疑問をいただき「人と人がつながり、コウノトリが思い届け『お水』もあめで1命」が守られていてほしい」とお話ししました。</p> <p>コウノトリについて、関心をもたれ、出費にいい日があるところで活用したいと話されていました。</p> <p>コウノトリの前で記念写真を撮り、お見送りしました。</p>

3. 島根県における地域づくりに向けて

現地視察を通じて、豊岡市の取り組みは、無意識な行動を含む様々な仕掛けの積み上げにより成り立っているものと感じた。特に、「ハチゴロウ」と名付けられた一羽の野生のコウノトリが地域に与えた影響は黒船やゴジラにも匹敵し、そのインパクトを“創造”に結びつけた豊岡の方の感性が、その後の工夫やつながりを生み、活動を加速させたと思うに至った。

現地視察から1ヶ月弱と短いが、島根県における取り組みの現状と、生物多様性の視点を地域づくりに活かすために考えたことを以下に整理した。

3.1. 生物多様性の保全に関する島根県での活動事例

3.1.1. 条例に関係する活動

島根県自然環境保全条例に基づく事例（赤名湿地性植物群落など）、島根県希少野生動植物の保護に関する条例に基づく保護管理（計5種）等がある。前者では専門家の指導を受けて、後者では保護管理計画に基づき県民との協働で保護活動が行われている。



赤名湿地性植物群落
(平成25年11月14日撮影)

これらの活動は、保護・保全とともに、環境教育の場として活用されているが、地域づくりを絡めた活動までの広がりはない。

3.1.2. ラムサール条例に関係する活動

ラムサール条約登録湿地である中海・宍道湖を対象に、“ワイズユース”の考え方にに基づき、複数のNPO等が様々な活動に取り組んでいる。これらの活動は、地域全体を視野に入れているが、現時点では各実施主体の単発的な活動のように思える。行政との協働を含む今後の更なる発展に期待したい。

3.1.3. ジオパークに関係する活動

世界隠岐ジオパークは、平成28年12月9日、日本ジオパークに再認定され、来年はユネスコ世界ジオパークの再認定の審査を受ける。昨年度の視察により、隠岐地域が一体となった活動を実感した場所である。また、島根半島と神話を結びつけた“くにびきジオパーク”の構想が島根大学を中心に準備されている。市民活動との一体感はまだ醸成中であるが、認定に向けて地域の歴史・文化と自然環境との関連性の構築に向けて、少しでも協力したい。



乳房杉
【H27 隠岐視察にて】

3.1.4. トキの分散飼育、大型水鳥類と共に生きる流域づくり

両事例とも自然環境保全と地域づくりの両立を目指しており、豊岡市と同様、多様な主体が関わっている（表-9参照）。私（松江市在住）の周りでは両事例とも話題はなく、少なくとも出雲以外での知名度は低いと考える。

トキの分散飼育の場合、国の方針もあり現在非公開であるが、将来的な一

般公開に備えて、トキが生息可能な環境づくりは始めることができる。出雲市トキ学習コーナーによると、市内の小中学校からの見学受け入れ、出前講師などを通じて市民への情報提供が行われている（5,000名/年程度の利用）。一方、地域を上げた取り組みまでは至っておらず、出雲市を中心とした今後の具体的な展開に期待したい。また、トキに関する協議会と大型水鳥類に関する検討協議会では共通メンバーも多く、双方で議論、情報交換を行うことで、宍道湖・中海地域全体の課題として議論する場ができればよいと考える。

表-9 トキの分散飼育及び大型水鳥類に関する協議会の概要

出雲市トキによるまちづくり推進協議会	斐伊川水系生態系ネットワークによる大型水鳥類と共に生きる流域づくり検討協議会
<ul style="list-style-type: none"> ・「トキ保護増殖事業計画（平成16年）」の一環として、平成23年1月から出雲市で分散飼育が開始。現在、非公開。 ・「出雲市トキによるまちづくり構想」が策定され、環境保全、経済活動を通じて、「出雲に住む人たちの心」「出雲ブランドの生み出す経済力」を通じた地域づくりが進められている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・大型水鳥類（ハクチョウ類、ガン類、ツル類、コウノトリ、トキ）の全てが安定的に生息可能な環境を有する斐伊川水系（国内唯一）において、自然環境保全と地域経済が両立した生態系ネットワークの形成を目指す事業 ・地域づくり部会、生息環境づくり部会を設置。
<ul style="list-style-type: none"> ・出雲市、関係団体（商工会・農協・漁協・森林組合・観光協会・自治会・学校・NPO）による協議会を構成。 	<ul style="list-style-type: none"> ・国、県、出雲市、関係団体（商工会・農協・漁協・観光協会・青年会議所・NPO）、専門家による協議会を構成。

3.1.5. その他

島根県では、貴重な自然や地域住民に親しまれている自然環境を「みんなで守る郷土の自然」として選定し、自発的な保全活動が展開されることよう期待されている。冬水たんぼ、棚田保全も生物多様性の保全につながる。小規模な取り組みが多いが、地域づくりの一翼を担う可能性がある。



引用) 島根県HPより

また、木質バイオマス発電の機運が高いものの、現時点では“生物多様性”の視点に乏しさを感じる。生物多様性に係る評価軸を新たに加えることにより、生物多様性の保全に係る地域活動に発展する可能性を秘めている。

3.2. 生物多様性の保全活動の活性化に向けて

3.2.1. 地域の魅力再発見

豊岡市でコウノトリを通じた地域づくりが成功したのは、地元の人々が地域の魅力を再発見したためと考える。新たな魅力発見は、外部の視点（他地域の人・Uターン者など）からの事例が多いが、島根県中山間地域センターの報告では“ドローンによる空撮映像”が、地元の人々が地域の魅力を再発見する機会になったとの報告もあった。新技術の積極的な導入も重要だろう。

3.2.2. 小さな拠点づくりとの協働

価値観の多様化に伴い人々の行動は分散し、メジャーな活動にも人手不足が生じる。人口の少ない地域では、その傾向が更に顕著になる訳だが、島根県では「小さな拠点づくり」という研究が進められつつある。「小さな拠点」の中に生物多様性の視点を日常生活と関連づけて導入することができれば、生物多様性の“見える化”ができて、地域の魅力発見につながる。

3.2.3. 学校の持つ可能性

私が今年参加したシンポジウムの中で「日生中学校（岡山県）のアマモ場の再生活動」、「芸北小学校（広島県）の茅プロジェクト」の活動報告があった。両者とも中学校が活動拠点であったが、活動を次世代につなげる仕組みづくりにおける学校の持つ可能性を感じた報告であった。いずれも、地域の資源を題材とした複数年に及ぶプロジェクト（複数の学年が関わる）であり、先輩が後輩を教えるプロセスを含む（このプロセスが重要）。現在、学校の教育活動と地域や技術が協働する機会は少ない。地域や技術と学校教育はもっとお互いを補完しあう関係になる必要があるのではないかと考える。

3.2.4. 他地域との情報共有

豊岡市のコウノトリは出雲市・雲南市にも飛来している。コウノトリの情報を広く県民に周知し、県民がコウノトリの情報を豊岡市に提供する仕組みをつくることで、島根県における環境意識の向上にもつながるものと考えます。

4. おわりに

豊岡市におけるハチゴロウの出現は、何気ない日常に“生物多様性の存在”を感じた瞬間だったのではないかと。その感覚が速やかな経済活動につながったのではないかと。島根県では和紙、酒、農作物など、生物多様性の産物が豊富にある。地域の魅力の背景にあるこの生物多様性を、環境学習・地域づくりのテーマとして“見える化”することも地域貢献の一つかもしれない。

視察時に「コウノトリとの約束」という言葉を聞いた。豊岡市で最後のコウノトリが死んだ時に、からなず飛ぶ世の中を復活させるとの約束である。私たちは次世代に向けて何を約束するのか、今一度考えてみたい。

<参考文献>

- ・このとり野生復帰のあしあと（平成 28 年 2 月、兵庫県豊岡市監修・発行）
- ・豊岡盆地の生きもの地図 2011（平成 23 年 3 月、NPO 法人コウノトリ市民研究所）
- ・「コウノトリと共に生きる～豊岡の挑戦」（兵庫県豊岡市パンフレット）
- ・「平成 28 年度島根県中山間地域研究センター研究フォーラム-東部地区 資料」、「ドローン活用事例報告 資料」（島根県中山間地域研究センター）
- ・「第 11 回全国草原サミット・シンポジウム in 上山高原 資料」（新温泉町全国草原サミット・シンポジウム実行委員会）
- ・「環境基本計画の点検にかかる環境シンポジウム 資料」（環境省）
- ・ホームページ（出雲市、豊岡市、島根県、国交省出雲河川事務所）